

関西大学
博物館所蔵

旧木村蒹葭堂所蔵の鋏形石

——奈良県島の山古墳の出土品——

徳田 誠志

一、はじめに

関西大学博物館が所蔵する考古学コレクションは、末永雅雄先生のご尽力によって関西大学にもたらされたものである。この博物館の存在は本大学で考古学を学ぶ学生だけでなく、多くの学生の教育、研究に寄与しているものである。

さて、このコレクションの中核は明治時代の政治家であり、初代人類学会会長を務めた神田孝平が蒐集したものであり、その後毎日新聞社社長本山彦一によって資料が充実し、今日の姿となっている。本稿ではこのコレクションにある一個の鋏形石に焦点を絞って考察していく。それはこの鋏形石が江戸時代中期の大阪において活躍した当代一の文化人木村蒹葭堂の旧蔵品であり、更にその出土地が平成八年初夏、多量の腕輪形石製品が出土した奈良県島の山古墳であることを論証していくものである。これらのことから、江戸時代の博物学者木村蒹葭堂に触れるとともに、関西大学コレクションの意義を博物館機能の一つと考える、調

査・研究機能という観点から考えていくこととしたい。

二、問題の鋏形石

今回取り扱う鋏形石は図1に示したとおりである。本品についてはかつて資料紹介を行ったことがあるので、その記述に基づいて法量、特徴を再確認しておく。全長は一四・四一センチを測り、鋏形石としては通有の大きさである。笠状部は板状部を水平に置いたとき左上がりとなる。このように笠状部上辺と板状部底辺が平行にならないことは、本来のゴホウラ製貝輪の形状に近いものとされ、型式学的に古相を示すものとされる。

さて、本品の最大の特徴は突起部が左側に取り付く点である。鋏形石の祖形となったゴホウラを縦切りにした場合、この突起部は右側にあるべきものであって、左側にあることは極めて異例と言える。このように突起部が左側に取り付くものは現在宮内庁書陵部が所蔵する伝巢山古墳出土の一例を知るのみである。この伝巢山古墳の資料についてもかつて

資料紹介を行っているので詳細はそちらを参照されたいが、明らかに左側に突起部が取り付いている。

この左側に突起部が取り付くという特徴が、次の江戸時代における文献史料との同定作業を行う際、重要な手掛かりになることを確認していただきたい。

もう一つ確認すべきこととして、本誌前号で述べたように現在のコレクションの中に江戸時代に製作された鍬形石のにも存在することから、今回取り上げた資料についてもその真偽を検討する必要があるであろう。

この点について結論を先に記すと、今回取り上げる鍬形石は古墳時代の製品と考えている。その理由として形状的に違和感がないこと、笠状部などの文様についても、その施文方法を含め、本来の鍬形石に認められるものであることによる。また、使用石材は分析によって碧玉であることが確認されており、材質の面でも真の鍬形石に使用されるものである。さらに原品を仔細に観察すると笠状部と環状部の接点付近にわずかに赤色顔料の付着が認められる。この状況は赤色顔料を恣意的に塗布した状況とは考え難く、古墳の内部施設において付着した結果と見る。このように本鍬形石は古墳時代の製品と考えてよく、後述するように奈良県島の山古墳からの出土品であることが確認できることも、逆説的ではあるが今回の考察が可能であるといえよう。

三、文献史料に描かれた鍬形石

本項では、図1の鍬形石と思われる個体の図が描かれている江戸時代

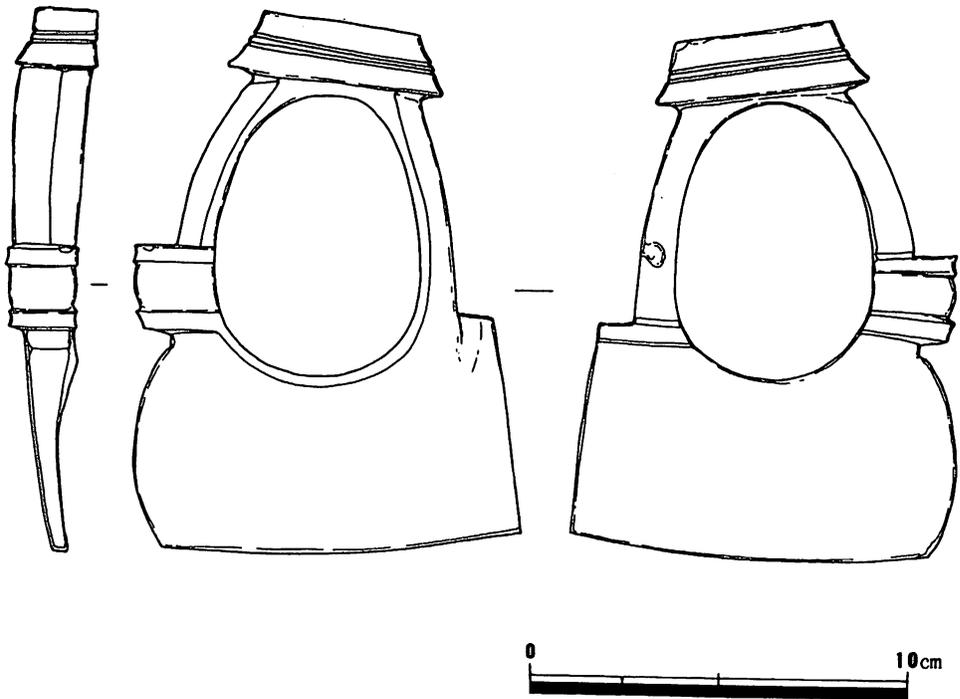


図1

の文献史料（絵図）を見ていく。

・『雲根志』

『雲根志』は江戸時代の弄石家であり、考古学的な視点も含めて石を蒐集した木内石亭の代表的な著作である。木内石亭の人物像については齋藤忠氏によって詳述されており、他にも考古学的な面からあるいは博物館学的な面からの考察も多い^⑦。よって詳しく触れないが、今回扱っている鍬形石と思われる個体が『雲根志』三編卷之五に記述されている。やや長くなるが全文を引用し、掲載されている図を示した（図2参照）。

「神代石四

安永四年乙未八月廿八日、浪華に遊で、兼葭堂を訪ふ。主人奇石を翫ぶ事年あり。此頃神代石一つを得たりとて見せらる。古今数なき奇石なり。その形状鍬がたの如く、長さ七寸中四寸ばかり。根の方厚さ一寸ばかり。末は薄くして三五分、本せばく末ひろし。本の方二寸に一寸ばかりなる一穴あり。表裏に高く筋を彫上たり。

全体青瑤瑯にて、奇なり。美なり。愛するに堪たり。玉工の及ぶ所にあらずして、其根源は彫刻の物なり。さきに述る濃州三宅氏が鍬形石と同物にて、至つて上品にして形また異なり。古代神工の物にていかなる物ともしる人なし。大和国唐院村の山中にて狐の穿出せりと。又奇ならずや。形図のごとし。」

この記述によって、所蔵者、大きさ、出土地、材質を知ることができる。描かれた図とともに詳細を見ていこう。図は今日という板状部を上にして描かれている。よって天地を逆にして見たとき、突起部が左側にあることが分かる。念のため今日という裏面を描いたものではないかという

疑いを持つが、内孔周縁の平坦面を示す線が認められることから表面を描いたものと判断できる。この図のように天地を逆に描いていることは、本誌創刊号において鍬形石の名称を検討した際にも記述したように^⑧、鍬がたとえ農具の鍬ではなく、兜の正面に取り付けられる鍬形の可能性も考えられるのではなからうか。

大きさの記述については全長七寸とあり内孔の径は長軸二寸、短軸一寸であることが読みとれる。色調、材質は青瑤瑯と記述されている。出土地は大和国唐院村とあり、図上の記述から安永元年（一七七二）の八月に出土したとされる。石亭は安永四年にこの鍬形石を実見し、享和元年（一八〇二）刊行の『雲根志』三編に掲載したことになる。この『雲

安永元年秋八月和州
虎隠村山中野狐
と穿出す浪華兼葭堂
所蔵あり

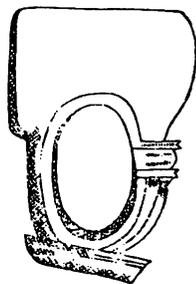


図2

根志』掲載の鍬形石と図1の鍬形石の同定作業は後述し、引き続き史料（絵図）を見ていこう。

その史料は神代石を描いた卷子である。石亭らが活躍した江戸時代の

寛政年間に石を集めることを楽しみとした同好の人々の間で、自ら所有する神代石を描き、卷子を作りそれを交換することが行われていた。さらにその卷子を懐中に友人宅を訪問し、コレクションを披瀝したり、あるいは神代石についての議論を楽しむなどの活動を行っていたようである。このような弄石社の活動が盛んであった一時期、おそらく一七五〇年から一八〇〇年ほどの五〇年間に多数の『神代石之図』が作成され、あるいは模写され、今日そのいくつかが伝えられている。これら多くの『神代石之図』については系統の整理が必要であるが、今回は実見できなかった種類の『神代石之図』に描かれた歛形石を見ていくこととする。

・『神代石之図』国立公文書館蔵

天地一四センチほどを測る小形の卷子である。冒頭に「木内重暁自筆」と書かれた付箋が添付されていることから、石亭の自筆本とされている。しかしながら描かれている神代石の図は次掲の『神代石之図』と比べると稚拙であり、図自体も縮小されていることなど原本と思えない部分もある。小形の卷子は先述したように懐中用であると思われる、同好の友人を訪問する際に携えていったものと考えられている。

さて、この中に描かれている歛形石は図示できなかつたが、板状部を上にし、「大和虎隠村山中得之 浪華兼葭堂蔵 長五寸横三寸三分 質青瑪瑙」との説明文が記載されている。細部には描かれているとは言えないが、緑色に着色されている。

この卷子が石亭の自筆本であるか否かについては検討が必要であり、製作年代も不明である。しかし、この歛形石が『雲根志』に描かれている歛形石と同一個体であることは疑いが無い。但し法量についての記述

は相違しており、この点は改めて検討する。

・『神代石之図』上巻 関西大学図書館蔵

この卷子は平成八年夏に東京本郷の古書店より関西大学が購入した史料である。図は他の史料と同じく板状部を上にして描かれ、「大和虎隠村山中得之 浪華兼葭堂蔵 質青瑪瑙」の説明文の記載がある(図3参照)。薄緑色に着色され、ほぼ実大に描かれているものと思われるが法量の記述はない。この卷子は次の東京大学所蔵史料と同系統の写本であると思われるので、東大本を記述した後両者を比較する。

・『神代石之図』上巻 東京大学総合研究博物館所蔵

この史料は現在東京大学総合研究博物館が所蔵するものであるが、かつては同大学理学部人類学教室が所蔵し、長谷部言人氏によって紹介されている^⑧。今回総合研究博物館が所蔵することになった際に、長谷部氏の紹介したすべてではないがいくつかの写本を実見できた^⑨。本稿では図4に示した、『神代石之図』上巻に描かれた歛形石についてのみ記述していく。板状部を上にして描かれた状況や、陰影の付け方も東大本と共通する。また記載されている説明文は全く同文であり、その記述されている位置もほぼ等しい。よって同一系統の写本であることは明らかであるが、図を仔細に比較すると東大本の図には内孔周縁平坦面を表現する縦線が一本省略されている。他の図や、原品と比較したとき内孔周縁平坦面を示すためには二本の縦線が描かれてしかるべきであり、東大本は転写の際に描き忘れたものと判断できよう。

さて、もう一点触れておくべき事として、長谷部氏が紹介しているように、これらの『神代石之図』を神田孝平(淡崖)が所蔵していた事実

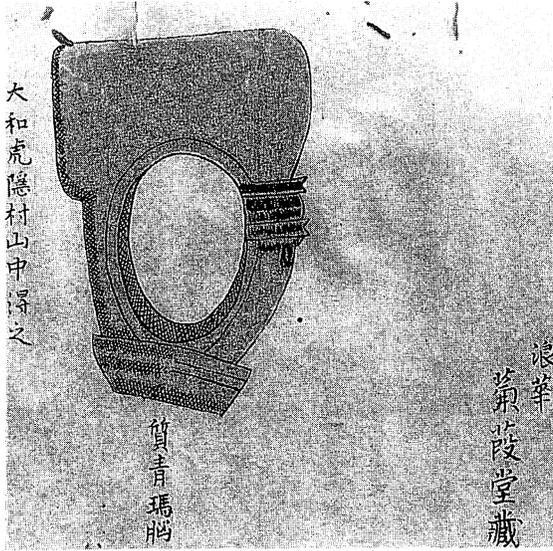


図 4



図 3

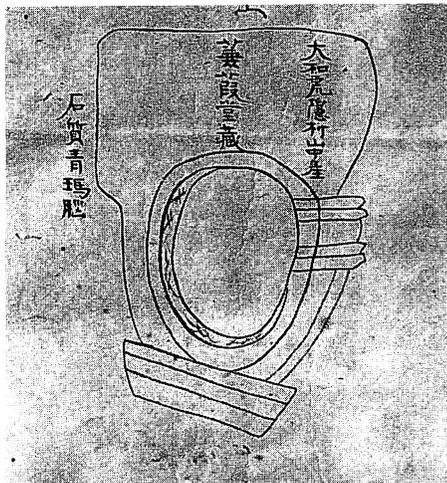


図 5

である。すなわち神田は江戸時代に神代石と呼ばれた石器そのものを蒐集するとともに、寛政年間からほぼ一〇〇年を経た後に、石亭ら弄石家の活動を復元していたことになる。

・『神代石之図』高山市郷土館所蔵

この『神代石之図』は現在岐阜県高山市郷土館が所蔵するもので、図5に示した。写真からも分かるように鉄形石は線描きであり、他の図が着色されたものであるのに対し大きく異なる。この図を見る限り写本の下書きのようにも見える。説明文の内容は基本的には同一であるが、先の『神代石之図』とは系統が異なるのかもしれない。

高山市郷土館には石亭らと交友関係にあった二木長嘯の蒐集した神代石が当時のまま所蔵されており、当時の活動を窺い知ることのできる貴重な資料となっている。

以上江戸時代の『雲根志』、『神代石之図』に描かれた鍬形石を見てきた。これらの図を見る限り原品が同一個体であると判断できよう。もちろん先述したように『神代石之図』についての系統の整理は必要であるが、江戸時代に知られていた鍬形石はほぼこの個体に限られていたと言える。

ところで、この鍬形石が江戸時代に海外にまで紹介されていた事実を付け加えておく。その図はドイツ人フリーリップ・フランツ・フォン・シーボルトによって著された『NIPPON』に掲載されているものである。『NIPPON』については一八三二年から二〇年以上の年月をかけて二二分冊で刊行されたものであるが、図6に示したものはその後出版された『縮小第2版』の復刻版によった。この著作はシーボルトが江戸時代後期に広く日本の文物を蒐集し、帰国後その研究成果をまとめたものである。内容は多岐にわたり、その中で日本の歴史、考古学分野について触れた中に、他の石器類とともに鍬形石の図が掲載されている。シーボルトが日本の考古学分野に興味を持ち、弟子の伊藤圭介から勾玉の情報を吸収していたことはすでに明らかにされている。また、彼自身が収集した和書の中に『雲根志』も含まれており、図6に示したものの原図が『雲根志』であることは明白である。鍬形石についての記述が特にないことからシーボルトが鍬形石をどのように考えていたかについては明らかでないが、この図書によって海外にまでもこの鍬形石が紹介されたことは興味深い。同時に、このことが石亭の『雲根志』が国内に広く流布していたことを傍証することにもなる。

続いて関西大学コレクションの中核を作り上げた神田の著作に示され

た鍬形石を見ておく(図7)。神田は先にも述べたように石器の蒐集とその研究に情熱を傾けているが、その成果としてまとめたものが明治十七年、英文で出版された『Notes on Ancient Stone Implements C & of Japan』(日本語『日本大古石器考』)である。序文において特に記述の

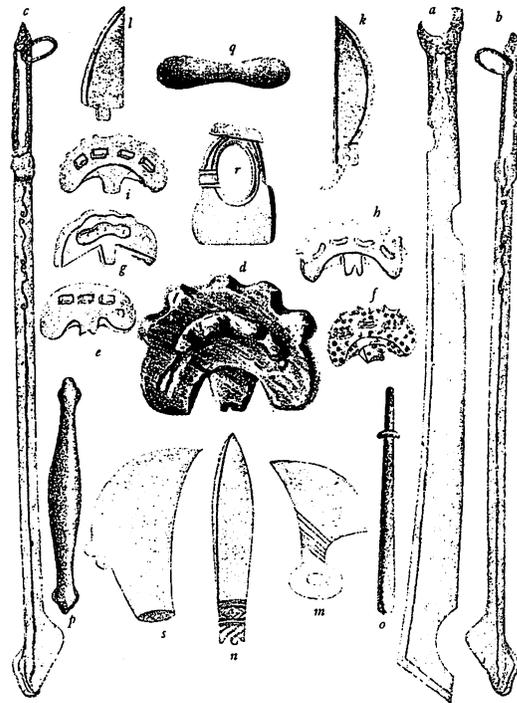


図6

ないものは自ら所有するものであることを述べており、これが図1に示した鍬形石であることは疑いない。この鍬形石の説明は以下の通りである。

「Similar to Fig. 1 Smaller but With hole large in Proportion. The upper portion sloping to one side. Jasper. Locality of discovery.

Toinmura in Yamato.」

この説明文のうち個体の記述は特に重要ではないが、横線部を付した出土地に注目したい。すなわち先の『雲根志』をはじめとする史料の中で出土地は「唐院村」とあり、神田の記述と一致する。このことから図の近似だけでなく、出土地の記述からも『雲根志』などの史料に描かれた鍬形石と図1の鍬形石が同じものであることが確認できる。

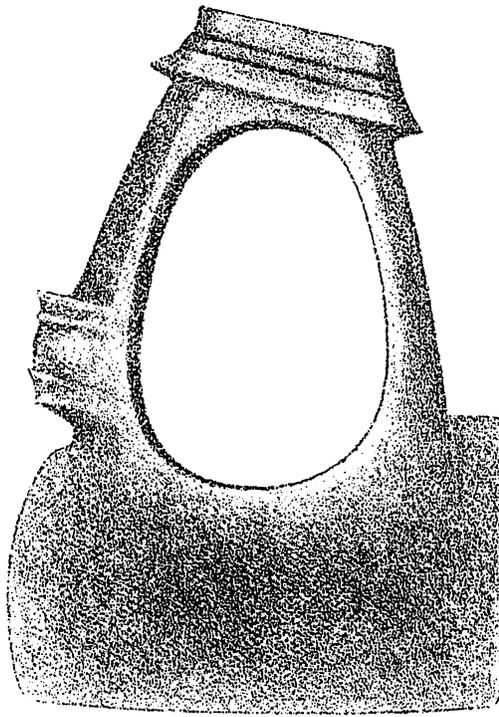


図7

このように神田の著作を介して安永元年に出土した鍬形石と現関西大学コレクションの鍬形石が同一であることを確信することができた。さらにこの点を補強するために図に示された法量と原品を比較しておく。史料のうち最も細かく法量の記述があるものは明治年間に刊行された今泉雄作の草稿本『古制徴證』に掲載されたものである。原本にあたる

ことができなかつたため、清野謙次氏によって著された『日本考古学・人類学史』に掲載された図面によった。計測は笠状部と板状部が平行にならないことから、全長、幅などについては測定方法によって誤差が生じやすい。よって最も計測しやすく誤差も生じにくいと判断する内孔の長径と短径で比較する。実物の計測値は長径七・二センチ、短径五・一九センチであり、『古制徴證』によると長径二寸三分、短径一寸六分八厘とある。よってその誤差はミリメートル単位であることが分かる。『雲根志』の記述は長径二寸、短径一寸ばかりなりとあり、正確でないことが分かる。『雲根志』は全長についても七寸と記述してあり、実物（一四・四センチ）と大きな誤差が認められる。このことは鍬形石が石亭の手元になかったことが誤差の要因であろう。なお、国立公文書館所蔵の『神代石之図』には五寸との記述があり、それほど大きな誤差ではないと判断できる。『古制徴證』に掲載された図が何を原本にしているか不明であり、この正確な数値がいつ、どのように計測されたかは不明である。しかしこの数値が正しいことは実物との比較において確認でき、このことから関大本、東大本の図は原寸に近く、形状のみでなく大きさの精度も高いことが分かる。

以上、図1に示した鍬形石をめぐる文献史料を見てきたが確認できたことをまとめておく。

- ・『雲根志』、『神代石之図』に描かれた鍬形石は突起部が左側にあることが共通し、大きさなどの情報からも、その実物が現関西大学博物館所蔵品である。

- ・出土地は大和国唐院村山中であり、出土年月日は安永元年八月であ

る。

・所蔵者は当時大阪に居住した木村兼葎堂である。

これらのことは神田が『日本大古石器考』を執筆した段階では自明のことであり、神田孝平も出土地を「Tomimura」と記述している。さらに神田が『神代石之図』を所有していたことから、この鍬形石が兼葎堂の手元にあったものであることは承知していたと見る方が妥当であろう。神田の死後、このコレクションは本山彦一の手に移るが、その時点でこの来歴が不明になったものと思われる。昭和一〇年に出版された『本山考古室要録』では、この鍬形石は出土地不詳となっている。^⑧

神田がいつこの鍬形石を入手したかについては不明であるが、おそらく購入という手段を取ったのではなからうか。よって兼葎堂の死去（一八〇二年）から、神田が明治一七年に刊行した著作に掲載するまでの約八〇年間の流転はいまだ闇の中である。

三、出土地奈良県「島の山古墳」について

本項では鍬形石が出土したと考えられる奈良県島の山古墳について触れておく。

出土地の記述は『雲根志』に「大和国唐院村の山中」とあり、図上の説明文では「和州虎隠村山中」と記述されている。この地名が現在の奈良県磯城郡川西町唐院であることは疑いない。出土地の記述に「唐院」あるいは「虎隠」の表記があるが、これは神田が英文で表記した「Tomimura」と訓むものであり同一と考えてよい。

さて『雲根志』には出土地が山中となっているが、腕輪形石製品が出土する場所としては古墳が一般的であり、しかも古墳時代前期に築造された大形前方後円墳であることが通常である。このことを勘案すれば出土地が唐院にある島の山古墳であることも自明であろう（図8）。

島の山古墳は島根山古墳との別称もあるが、現在は島の山古墳で統一されている。周囲に周濠をめぐらした全長一九〇メートルを測る前方後円墳であり、奈良県下第二〇位の規模を誇る。立地は大和川に合流する寺川と飛鳥川に挟まれた微高地にある。^⑨この島の山古墳前方部の粘土層から、平成八年初夏多量の腕輪形石製品が出土したニュースは記憶に新



図8

しい。

さて、今回紹介している鍬形石は前方部が未盗掘であったことから、後円部埋葬施設より出土したものであると想定できる。この内部施設が

竪穴式石室であると考えられていることは、隣接する比売久波神社などに残されている石材から想定されている。

この後円部の埋葬施設は明治時代にも盗掘されたとの記録があり、島の山古墳出土とされる腕輪形石製品が東京国立博物館、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、天理大学天理参考館、地元などに保存されている。

そのうち天理参考館が所蔵する車輪石について実見した^⑧。その車輪石は楕円形のもの五点、円形のもの一点である。楕円形のもの長径一八センチ―一二センチを測るものであり、円形のもの直径一〇センチ前後のものである。前者は匙面取りの放射状凹帯がめぐり、後者は山部、谷部に沈線が施された折面帯の文様を持つ^⑨。これらの材質、色調は流紋岩質溶結凝灰岩といういわゆる緑色凝灰岩（グリーンタフ）である。色調は基本的に淡緑色であるが、全体に錆が付着したような茶褐色に変色しているものが多い。

さて、これらの色調、石材を図1に示した鍬形石と比較すると、鍬形石が硬質感のある碧玉であるのに対し、天理参考館が所蔵する車輪石の材質及び色調とはかなり相違すると言わざるを得ない。この相違を図1の鍬形石をもって島の山古墳出土と確定するのにはやや躊躇させるものであった。また後円部出土と思われる刀子形石製品が比較的新相を示す個体であることも、同一の主体部からの出土品としてよいかの疑問を抱かせるものであった。

ところが平成八年の前方部粘土榎から出土した腕輪形石製品は形式的にも、また材質的にも非常に多くのバリエーションがあることが判明し、

先の懸念が払拭された。前方部出土品については整理途中のため詳細は不明であるが、現地を確認したかぎりでは、天理参考館が所蔵する車輪石と同様の石材から、硬質感のある個体も共存していた。すなわちこのような前方部の状況を見ると多量に腕輪形石製品が埋納された主体部においては、石材・型式に多くのバリエーションを持つ傾向にあると考えられる。このことは多量に腕輪形石製品が出土した奈良県新山、菓山古墳についても指摘できるものである。このような多量埋納は腕輪形石製品を副葬することにおいて、比較的新しい段階の副葬状況であると考えられる。それゆえ、多量埋納はそれまで伝世してきたであろう古相の腕輪形石製品も埋納することとなり、結果的に新古の腕輪形石製品や新相のその他石製品が混在し、石材についてもバリエーションを持つ結果となつて、今日出土していると考えている。本論から離れたが、図1の鍬形石の石材が他の車輪石などの石材と異なることが必ずしも出土地を否定するものでないことだけを述べておきたい。

さらに、図1の鍬形石が島の山古墳出土であることを補強するために、江戸年間に島の山古墳から腕輪形石製品が出土している資料を示しておく。

その史料は現在愛知県西尾市立図書館岩瀬文庫が所蔵する『諸国産出記』と『石亭翁所蔵石製品産志』である。両史料とも旧国別に出土する石の名称と出土地点を記述した図書である。もちろん今日で言う考古品だけでなく、むしろ自然石（鉱物）が多いものであるが、その中で大和国の項目に以下の文章が見られる。

「車輪石 右兩種有之処稀ニアリ大小形状光彩不一又葛城山ノ麓辨天

山坂口村又虎隠村等ニテ得之」(横線部筆者)

この史料によれば虎隠村から、すなわち島の山古墳から鍬形石のみではなく車輪石が出土することも江戸時代に知られていたことを示すと言えよう。

五、旧所蔵者木村兼葭堂について

本項では鍬形石の旧所蔵者である木村兼葭堂について触れておきたい。兼葭堂については高梨光司氏の言葉を借用すると「徳川時代の大阪が産出した最も教養豊かな一大文化人」との一語に尽きる²⁰。このように表現される兼葭堂の人物についてそのすべてに言及することは不可能であるが、諸先学の研究成果を援用しながら記述していく²¹。

木村兼葭堂は元文元年(一七三六)に大阪に生まれ、名は孔恭、字を異斎といい、兼葭堂の堂号は庭の井戸から出た芦の根にちなむという。享保二年(一八〇二)に六七歳の寿命を全うする。家業は酒造業であり、通称坪井屋吉右衛門という。彼はこの酒造業を営む傍ら、本草・物産学、絵画、漢籍詩文を修得し、当時最新の学問であった蘭学についてもかなりの知識を有していたようである²²。

彼の人物像は二代目賀川秀哲の編修した『南陽叢書』巻一一(宮内庁書陵部蔵)に収められている「兼葭堂自伝記」によって知ることができ²³る。

自伝及び諸先学の研究によれば、一六歳の時津島桂庵に師事し、津島の死後、小野蘭山のもとで博物学を学ぶ。小野を師としたことから石亭

と兄弟弟子の関係になっている。このような経歴の中で、今回扱っている鍬形石が出土した前後の時期について、年譜を参照しながら兼葭堂の状況を見ておくこととしたい。

鍬形石が出土した年月日は先にも述べたように安永元年(一七七二)八月であり、兼葭堂三七歳である。この前後の状況は明和五年(一七六八)に長女スエが誕生し、続いて明和八年に次女ヤスが生まれている。長女ヤスは安永三年に病死するが、二一歳で結婚したものの、長く子に恵まれず、妻妾同居という当時においても変則的な家庭生活の中で、待望の子供の誕生を迎えた時期であるといえよう。物産学の面からは安永二年に石亭の『雲根志』前編が刊行され、石を蒐集し研究するという弄石社の活動がいよいよ盛んになってくる。そして、安永四年石亭が木村邸を訪問したとき兼葭堂は四〇歳であり、この年大阪で物産会が開催されている。兼葭堂がこの物産会で中心的な役割を果たしたであろう事は容易に想像される。このように、この時期の兼葭堂は家庭的な面でも、物産学の面でも充実した日々を過ごしていた時期といえよう。

石亭が兼葭堂の所蔵した鍬形石を評して「奇なり。美なり。愛するに堪えたり。」と垂涎の的であったことを窺わず文章を残しているが、兼葭堂にとつても自慢の品であったのではなからうか。この鍬形石をどのように入手したかは不明であるが、彼の広い交友関係の中で情報もたらされたことは想像でき、おそらく購入という手段であろうと思われる。兼葭堂の興味は石のみではなく広く万物にわたっており、自伝において自らの収集品を記述している。その中に書画の類から、動植物、魚貝類までもが含まれ、さらに古器物を挙げている。その用途をすべて「考

「索ノ用トス」と述べているところに、彼自身の研究態度を読みとることが出来る。

兼葭堂についてもう一点触れておくべきこととして、彼が私設博物館の創立者であり、その館長あるいは学芸員としての役割を果たしていたことである。木村邸が広く門戸を開いた私設博物館的な性格を有していたことは、彼の交友関係が上は大名家の武士階級から、庶民一般にまでわたっていたことから指摘される。彼の蒐集品が今日でいう考古学分野から自然科学分野にまでわたっていたことから、総合博物館といつてよい機能を果たしていたように思われる。

兼葭堂は大阪という当時最大の商都という立地を背景として、多くの情報・文物に接していた。同時にこの交通の利便性が彼の存在を日本国内のみならず海外にも知らしめた要因でもあろう。

木村邸には様々な分野に興味を持つ、いろいろな階級の人々が入りし、蒐集された文物を前に口角泡を飛ばす議論を楽しんだのではなからうか。石亭が鍬形石を実見したこともこのような中の一コマであろう。

このような活動をもって兼葭堂を博物館活動の創始者として位置付けるものである。しかしながらこの活動も彼の存命中に限られてしまったことが、近代的な意味での博物館へ続かなかつたこととして指摘できる。もちろん江戸時代中期という時代的な制約があるのだが、彼の死後蒐集品はほとんどが散逸してしまっており、このことは兼葭堂博物館の限界を端的に示している。兼葭堂の死後、幕府が彼の蒐集した図書を差し出すように命じ、その対価として五〇〇両が支払われたことが知られている。文物については記録が明らかではないがおそらく散逸し、今回扱っ

た鍬形石もその中に含まれていたものであろう。

兼葭堂が蒐集した資料の中の貝石標本については、いくつかの所蔵先を転々とした後、近年大阪市立自然史博物館に収められた。この貝石コレクションは当時の標本箱に収められた状態で保存されており、木村邸における保管状況を窺い知ることができる。このように当時の状況を保った姿で保存されているこのコレクションは、兼葭堂が蒐集した文物の中でも希有な例であり、その意味でも重要視される。

江戸時代中期に木内石亭、木村兼葭堂ら町人学者と呼ばれる人々によって芽生え始めたかに見えた博物館活動の萌芽も、多くの人々に開放的であり、自然発生的な私設博物館であったがために根付くことはなかった。我国において今日という博物館学としての学問導入は、明治維新以後の欧米からの知識導入によって、官主導のもと組織的に開始されることを待つことになった。しかしながら、兼葭堂、石亭らの活動が博物館活動の母体としてあり、この礎があつたからこそ、欧米からの知識導入が短期間に確立したものであることを記憶しておく必要がある。

六、まとめ

これまで、図1に示した鍬形石が安永元年に今日の奈良県島の山古墳から出土したものであつて、それが当時大阪に居住した木村兼葭堂の手元にあつたものであることを述べてきた。

最後にまとめとして関西大学博物館の考古学コレクションの意義について、博物館機能の一つであると考えられる調査・研究機能の観点からまと

めておきたい。

関西大学の考古学コレクションは冒頭で述べたように神田孝平、本山彦一によって明治から昭和にかけて蒐集されたものである。このような個人コレクションの場合、出土地、来歴などが不明なものも多く含まれ、その点では一級資料でないとされる点があることはやむを得ない。しかしながら今回その中の鍬形石一点ではあるが、出土地、来歴を明らかにした点に本稿の意義を求めたい。

出土後二〇〇年以上の年月が過ぎた今日、博物館活動の潜在的創始者として位置付けられる木内石亭、木村兼葭堂らが手にしたのであろう。鍬形石を偶然ではあるが関西大学が所蔵していることは、博物館活動の学史を振り返る上でも貴重な資料といえよう。

今回は鍬形石一点であり、しかもその突起部が左側に取り付くという特異なものであったことから、江戸時代の史料に描かれた神代石と同定することができた。おそらく現在関西大学博物館が所蔵する他の石器も江戸時代弄石家の手元にあつたものが含まれているものと考えられる。このことを確認するためには『雲根志』、『神代石之図』に掲載されている図との精緻な同定作業が必要であり、その作業は困難でもあろう。しかしこの作業を進めていくことによって来歴が明確でない資料を一級資料へと高めていくことができるものと考えている。

二〇〇年前前大阪に居住し、文化人としての名声の高かった木村兼葭堂の所蔵品が、今日大阪の地にある関西大学に収蔵されている事実を、ここで学んだ一人として幸運に感じるものである。

さて、筆者は本誌創刊号で「腕輪形石製品の名称とその用途―博物館

の展示にあたって―」と題し、続く二号で「腕輪形石製品のにせもの―その存在と博物館における保管・収集業務について―」を執筆した。前者は博物館活動の展示・普及活動に焦点を当てたものであり、後者は副題にもあるように保管・収集業務を扱った。そして今回博物館活動（機能）の三つ目として、調査・研究活動に主眼を置くものとして論述してきた。

古墳時代前期の社会を腕輪形石製品によって考察していくため、その資料収集を通じて博物館を利用していく中で、腕輪形石製品を題材として博物館の問題を考察してきた。創刊号でも述べたように筆者は日々博物館に身を置くものではないことから、学芸員としての業務に精通しておらず、そのため観念的な考察に終始していることを反省している。また、江戸時代史料の扱いには不十分な点も多いものと思われる。これらのことは今後への課題と銘じ、多数のご叱正を乞うものである。

註

- ① 徳田誠志「資料紹介 鍬形石」『関西大学考古学等資料室紀要』第2号 一九八五年
- ② 木下尚子「鍬形石の誕生」『日本と世界の考古学―現代考古学の展開―』岩崎卓也先生退官記念論集 一九九四年
- ③ 徳田誠志他「書陵部所蔵石製品Ⅰ」『書陵部紀要』四二号 一九九一年
- ④ 徳田誠志「腕輪形石製品のにせもの―その存在と博物館における保管・収集業務について―」『関西大学博物館紀要』第二号 一九九六年
- ⑤ 関西大学工業技術研究所「関西大学考古学等資料室所蔵石器資料の石質

調査』一九九〇年

⑥ 齋藤忠『木内石亭』人物叢書 一九六二年

⑦ 中川泉三「雲根志の著者木内石亭」『考古学雑誌』第一五卷一一号 一九二四年

中川泉三編『石の長者木内石亭全集』下郷共済会 一九三六年

中谷治宇二郎「石を愛する心木内石亭と弄石社中」『考古学雑誌』第二六

卷四号 一九三六年

長谷部言人「木内石亭と鈴木甘井」『民族文化』一九四〇年

土井道弘「石の長者木内石亭」『考古学の先覚者たち』一九八五年

宇野茂樹「木内石亭」『國學院大學博物館学紀要』第一輯 一九八七年

栗東歴史民俗博物館「石の長者・木内石亭」企画展図録 一九九五年

⑧ 齋藤忠編著『日本考古学史資料集成』1 江戸時代 一九七九年

⑨ 徳田誠志「腕輪形石製品の名稱とその用途—博物館の展示にあたって—」

『関西大学博物館紀要』創刊号 一九九五年

⑩ 長谷部言人「神代石」『考古学雑誌』第三〇卷一〇号 一九四〇年

⑪ 史料の実見にあたっては東京大学総合研究博物館赤澤威教授にご高配賜

った。記して感謝申し上げます。

⑫ 史料の実見にあたっては高山市郷土館学芸員田中彰氏にご高配賜った。

記して感謝申し上げます。

⑬ PH. FR. VON SIEBOLD『NIPPON ARCHIV ZUR BESCHREI-

BUNG VON JAPAN』1987 BIBLIO VERLAG OSNABRUCK 1969

⑭ 齋藤忠「勾玉に関する記述」『シーホルト「日本」の研究と解説』一九

七七年

⑮ 神田孝平『Notes on Ancient Stone Implements C & of Japan』日本題

『日本大古石器考』一八八四年

⑯ 清野謙次『日本考古学・人類学史』一九五四年

⑰ 末永雅雄『本山考古室要録』一九三五年

⑱ 木下巨他「磯城郡島の山古墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』一九九四年度 一九九五 奈良県立橿原考古学研究所

⑲ 資料の実見にあたっては天理参考館学芸員藤原郁代氏にご高配賜った。

記して感謝申し上げます。

⑳ 泉森 皎他「奈良県磯城郡川西町 島の山古墳」一九九二年 川西町教育委員会

㉑ 発掘現地の見学にあたっては、奈良県立橿原考古学研究所河上邦彦氏、

西藤清秀氏にご高配賜った。記して感謝申し上げます。

㉒ 高梨光司『兼葭堂小伝』高島屋兼葭堂会 一九二五年

㉓ 南木芳太郎編『兼葭堂号』『上方』一四六号 一九四三年

大阪史談会「木村兼葭堂百五十年忌展観目録」『大阪史談』復刊 第二号

一九五七年

水田紀久『兼葭堂日記』翻刻編 兼葭堂日記刊行会 一九七二年

田村利久「木村兼葭堂の古代学」『考古学の先覚者たち』一九八五年

有坂道子「木村兼葭堂の交遊—大阪・京都の友人たち—」『大阪の歴史』

四六 大阪市史編纂所 一九九五年

⑳ 有坂道子「市井の蘭学—木村兼葭堂にみる—」『日本史研究』四〇五

一九九六年

有坂道子「西欧文物の受容と大阪の知識人—履軒・永錫・兼葭堂をめぐる—」『ヒストリア』第一五一号 一九九六年

㉕ 水田紀久「本自同根生」『國文学』第五四号 関西大学国文学会 一九七

七年

㉖ 大阪市立自然史博物館「木村兼葭堂の貝石標本 江戸中期の博物館コレク

シヨ
ン
『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』 第一四集 一九八二年